

# 石見海域漁場保全調査 2（食中毒原因細菌調査）

（漁場保全対策推進調査事業）

石原成嗣・井岡久・開内洋

## 1. 研究目的

腸炎ビブリオによる細菌性食中毒の発生件数は、戦後、安全衛生管理に対する各方面での取り組みにより減少する傾向であったが、ここ数年の食中毒発生件数の第1位になるなど増加傾向にある。これは、感染力の強い血清型 O3:K6 株の増加によるものと考えられており、漁業の現場サイドでの対策が求められている。

今回、当該菌による漁獲物の汚染対策の一資料とすべく、石見海域の沿岸部における、腸炎ビブリオの発生状況を調査した。

## 2. 研究方法

試験船「明風」により、浜田・江津・温泉津沖 1～3km の沿岸海域の表層海水を 1ℓ採取した。

海水は試験場に直ちに搬入後、速やかにフィルターで濾過を行った。濾過済みのフィルターを 100ml の食塩ポリミキシンブイオン中に投入し、18 時間培養後、TCBS 培地上で画線培養を 24 時間行った。培地上に現れた緑色コロニーを、1%NaCl 加 TSI 寒天培地に刺突培養して確認試験とした。

## 3. 研究結果

採水月日・測定項目		浜田沖	江津沖	温泉津沖
7月6日	水温	不明	不明	不明
	腸炎ビブリオ	-	-	-
8月3日	水温	26.9	26.5	26.3
	腸炎ビブリオ	+	-	+
9月28日	水温	23.2	21.9	22.9
	腸炎ビブリオ	-	-	-

（備考） -：陰性 +：陽性

## 4. 研究成果

島根県沿岸の腸炎ビブリオ発生状況を把握することで、今後の水産物の衛生管理対策への手がかりの端緒となりうるか、その評価も兼ねて実施したが、漁場環境あるいは品質管理の評価指標として、重要な情報になると考えられた。今回は、公定法に準じた定性試験を行ったが、疑陽性菌もプラス（+）として検出されてしまい、より精度の高い調査とするためには、耐熱性溶血毒産生株の定量も考慮する必要がある。